

# スイスアルプスの自然環境保全と多様なアクティビティ

池永正人

長崎国際大学人間社会学部

本稿では、スイスアルプス世界自然遺産のアレッチ地域における自然環境に配慮した多様な観光の取り組みと、サンモリッツにおける冬季観光の多様性の実態について明らかにした。アレッチ地域では、多数の官民関係者の積極的な参加によって、自然・文化景観の多様性と固有性、生態系が保全されている。世界遺産の大アレッチ氷河を間近で眺望できるベットマーアルプは、四季の自然や夏季の家畜放牧、住民の伝統文化を観光資源として有効活用し、年間を通じて各種スポーツや文化的催事が行われている。また、冬季スポーツの発祥地と称されるサンモリッツは、冬季スポーツ競技の国際大会を積極的に誘致・開催することで、住民の生活基盤やスポーツ・宿泊・交通など各種施設が整備され、多様な冬季スポーツの体験や観戦、各種観光催事による冬季観光が発展した。以上のように、両地域では自然環境に適応する観光業が成立している。

キーワード：観光多様性、自然環境保全、アクティビティ、ベットマーアルプ、サンモリッツ

## I はじめに

### 1. 研究の背景

スイスの国土(4.1万km<sup>2</sup>)は、日本の九州本土ほどの広さであるが、起伏に富んだ雄大で美しい自然景観や優雅で固有の文化景観が展開している。スイス国民は、これらの土地資源の有効活用に研究と開発を進めてきた。全国のホテル・保養所の宿泊客数は3,466万人(2012年)である(図1)。うち外国人は55%(1,907万人)を占め、スイスの人口804万人の2.4倍に相当する。観光立国を標榜するスイスは、製品や施設・サービスの信頼性、時間・規則の高度な遵守、そして多文化社会の政治的・経済的安定性を観光発展の基本条件としている。

スイス国土の60%を占めるアルプス地方では、標高800~2,000mの傾斜地や谷底地に集落が立地している。そこでは居住地域の自然や農業、歴史や文化を観光資源として有効に活用し、登山・ハイキングやスキー、催事などのアクティビティ(activity, 体験型観光)が盛んである。これは、

年間を通して多様なスポーツや文化的催事が可能な自然環境と、宿泊、交通、スポーツ、商業、医療などの社会基盤が整備されていることに起因する。

スイスアルプスの山岳観光地に関する最近の主な研究成果としては、観光業と農業の共生の視点から研究した石原照敏の2編の論文があげられる。まず、石原(2009)は、スイス・高アルプスにおける観光業と農業の共生形態・変容および要因を、ホテルの発展や農業経営規模などの地域差に焦点を当てて解明した。スイス・高アルプスでは、高度経済成長以降、農業より収益が多く、農家民宿よりも賄いの労力が省ける休暇用住宅<sup>1)</sup>経営が増加し、共生形態は同経営を中心とする観光業と農業の共生形態に変容したと論述している。また、石原(2010)は、スイスにおける観光業と中小農業経営の共生形態について、ヴァレー州(仏語:Canton Valais, 独語:ヴァリス州Kanton Wallis)の高アルプスのクラン・モンタナ(Crans-Montana)における休暇用住宅経営と中小農業経営の共生形態の形成・崩壊およびグリーンツーリ

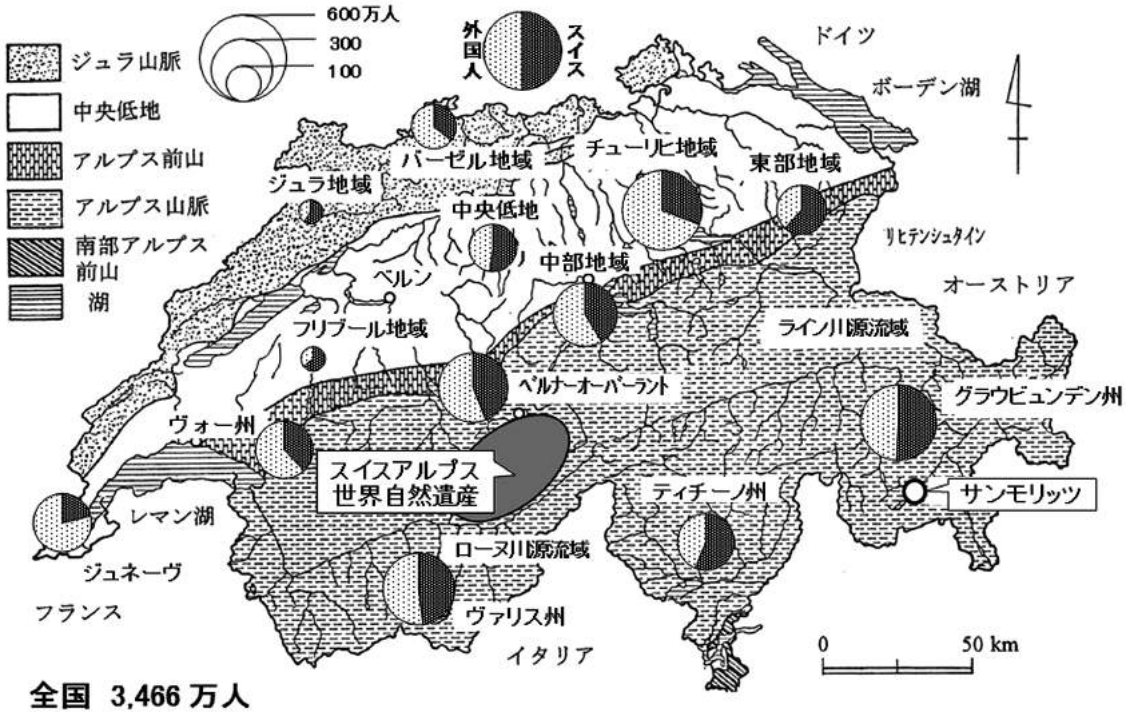


図1 スイスの地域別ホテル・保養所宿泊客数（2012年）

（Bundesamt für Statistik（2013）により作成）

ズムの展開、ヴォー州（Canton Vaud）の丘陵地帯（前アルプス）における農家民宿と中小農業経営の共生形態の形成について論述している。

環境に配慮した山岳観光地の発展については、池永（2009, 2012）がツェルマット（Zermatt）の観光発展とカーフリー交通の現状、景観保全の家屋建築規制について明らかにした。坂本（2012）は、スイスアルプスの山岳リゾートを拠点に、眺望・安全性・歩行性に優れ、しかも効率良くハイキングができる適度なコースを選定して、アルプスの自然や農業・観光業などについて地理学の視点から詳細に解説した。また、中西（2013）は、ヨーロッパのアルプス山脈にある登山鉄道・ケーブルカーのすべてに乗車し、その勾配・最高所・印象を一覧表にして説明するとともに、郵便バス

で越えられるベスト20の峠について体験談を交えて紹介している。

このほかに、Lütolf（2012）はスイスにおける保養アパート（Ferienwohnung）の現状について分析し、Rucki（2013）は、オーバーエンガディーン（Ober Engadin）における1860年からの高級ホテル建築の歴史を記述している。また、Galli and Fromm（2013）は、サンモリッツ（St. Moritz）とエンガディーンの旅案内を著述している。

しかし、スイスアルプスの山岳観光地について、多様な価値観をもつ国内外の老若男女の観光需要を満たす観光多様性の視点から研究した成果はみられない。

## 2. 研究の目的と方法

そこで、本稿ではまずユネスコの世界自然遺産に登録されているスイスアルプスのアレッチ地域 (Aletsch Arena) を取り上げ、自然環境に配慮した多様な観光の取り組みについて明らかにする。次に、高級リゾートとして世界的に著名なサンモリッツを対象に、冬季観光の多様性の実態について究明する。

この目的を達成するために、研究対象地域に関する文献・資料の分析を行うとともに、現地調査 (アレッチ地域: 2011年8月下旬, サンモリッツ: 2013年3月中旬) では、観光協会や宿泊施設に対する聞き取り、土地利用・輸送交通機関・観光施設・観光客行動などの観察調査を実施した。具体的には、アレッチ地域においては観光地化の進展を把握するために、1980年7月調査時と同じ場所で土地利用観察を行った。また、サンモリッツでは観光客の発地を明らかにするために、自家用車のナンバープレート調査を実施した。

なお、本稿では観光多様性を健康増進、風景観賞、自然観察、地域学習など、老若男女の幅広い客層の身体的・知的欲求を満たす多種多様な観光活動と定義する。

## II スイスアルプス・アレッチ地域の自然環境保全

### 1. 世界自然遺産スイスアルプス

スイスアルプスの中央部に位置するユングフラウ地域 (Jungfrau Arena) とアレッチ地域は、2001年12月にアルプス山脈で初めて世界自然遺産に登録された。登録当初の名称は「ユングフラウーアレッチービエツチホルン, Jungfrau-Aletsch-Bietschhorn」であったが、2007年の指定区域拡大とともに、名称も親しみやすくわかりやすいようにと、「スイスアルプスーユングフラウ・アレッチ, Swiss Alps Jungfrau-Aletsch」に変更された。指定区域は、26自治体

(Gemeinde, ゲマインデ) にまたがる面積824km<sup>2</sup> (佐渡島855km<sup>2</sup>に相当) である。この区域の57%が南部のヴァリス州 (18自治体), 43%が北部のベルン州 (Kanton Bern, 8自治体) に属する (図2)。

また、この世界遺産は面積の42% (350km<sup>2</sup>) が氷原であり、そこにはスイスアルプスの7大氷河のうち、五つの氷河が集中している。最大の大アレッチ氷河 (Grosser Aletschgletscher) は、延長24km, 厚さ最大800m, 容積270億トンである (図3)。良好に保全されたこの氷河は、電源開発や飲料・灌漑用水の水源であるとともに、壮麗な景観や氷上がアクティビティの対象となっている。

### 2. 世界自然遺産に登録された理由

スイスアルプスのユングフラウとアレッチの両地域は、三つの自然遺産基準を満たして世界遺産に登録された (Jungfrau-Aletsch-Bietschhorn World Heritage Association, 2005, 以下JABと略称)。その内容は、①高峻な山岳地域であることから、地質の情報源や気候変動の証拠として氷河に覆われていることの重要性、②氷河の侵食によるダイナミックで多様性に富んだアルプス山脈の生態系の重要性、③山地農業の営みを通じて形成された地域の美しい風景と趣のある表情である。換言すれば、大部分が氷河に覆われた地域であり、ユーラシア大陸で最大・最長の氷河を含めて、高峻なアルプス山脈の形成を解明する典型的な事例を提供していることが評価された。とくに、現代が気候変動に起因する氷河の後退を認識できる時期であること、生態系の広範な多様性を包蔵していること、そして、ヨーロッパの芸術や文学、登山をはじめとするアルプスの観光において、重要な役割を演じる印象的な景観を有していることが登録理由である。





図2 スイスアルプス世界遺産登録区域と所属26自治体（2013年）  
（スイスアルプス世界遺産協会の原図により作成）



図3 世界自然遺産の大アレッチ氷河  
（2011年8月28日撮影）  
氷河中央の黒い筋はモレーンである。

### 3. 保護と開発の経営計画

スイスアルプス世界遺産協会（Swiss Alps Jungfrau-Aletsch World Heritage Association, 2007年の指定区域拡大前はJAB）は、世界遺産の保護と持続可能な地域開発の促進に適切な均衡を維持することが、スイスアルプス世界遺産の経営計画において重要であると認識している。そして、この経営計画は連邦、州、自治体、民間団体が参加できる枠組みの中で実施されなければならないと指摘している。

経営計画は、主に世界遺産の周辺地域に向けられたものであるが、世界遺産地域全体に適用できる六つの全体的な目標に基づいている。最初の三つの目標は、自然・文化景観の多様性と固有性、自然および近自然の生態系、そして動植物相を完

全に保護する内容のものである。その焦点は、人間の行為による開発と同様に、自然の変化を包含した保護に関する活発な取り組みにある。他の三つの全体的な目標は、適切な社会・経済的利用を保証して、関係者や住民の意識の高揚と意思疎通の重要性を強調することである。

具体的な活動内容は、必要性が認められた個々の対象分野の中で69項目が明示されている。すなわち、自然・文化景観（5項目）、動植物（3項目）、農業と林業（14項目）、狩猟と釣り（5項目）、製造業、貿易、商業（8項目）、エネルギーと運輸業（12項目）、観光業と訪問者管理（12項目）、文化、教育、情報、研究（10項目）である（JAB, 2005）。

これによって、持続可能な地域開発を世界遺産の保護と組み合わせる必要性が生じた。地域の社会や経済を規定してきた山地農業と同様に、森林、狩猟、釣り、文化景観と密接な繋がりのある観光業の推進は、とくに重要視されている。スイスアルプス世界遺産の目標と活動内容が、特定の組織あるいは管理団体に委託できない事実を背景に、多数の官民関係者の積極的参加を必要としている。

#### 4. 気候変動の観察地および観光資源としての価値

スイスアルプス世界遺産の指定区域には、既述のように五つの氷河を含む氷河域があり、そこは気候変動の観察地として重要性が高い。

スイスアルプス世界遺産は、主に高所の氷雪や山岳の自然景観から構成されており、指定区域の85%が標高2,000m以上の土地である。また、全域の土地利用は、非生産的植生と不毛な区域が88%を占める。しかしながら、これらの自然景観は静止状態に近く、最近の数十年間における氷河の急速な後退の結果、広範囲におよぶ生態系の変

化がみられる（Bachmann, 2006）。スイスアルプス世界遺産の指定区域と周辺の大部分が、人間によって直接利用されていないにもかかわらず、そこは観光名所やレクリエーション空間として重要な役割を果たしている。

世界遺産地域に属する26自治体の経済の主要な部分と3万5,000人の住民は、直接あるいは間接的に観光業と結びついている。ホテル・レストランの従業者比率は、全体の30%を占める。スイスアルプス世界遺産の景観の魅力は、アルプスの印象的な地形景観のみではない。周辺地域において、800年もの間営まれてきた山地農業、すなわち家畜飼養のアルプ農業（Alpwirtschaft、またはアルム農業Almwirtschaft）<sup>2)</sup>によって形成された伝統的な文化景観との対比にもある。

### III スイスアルプス・アレッチ地域における山岳観光の多様性

#### 1. アレッチ地域のカーフリーリゾートの発展

ガソリン車の乗り入れを禁止した山地の観光地、いわゆるカーフリーリゾート（Car-free resort）に共通した立地条件がある。それは、まず自然条件についてみると、観光客を魅了する優れた景勝地であるが、土地が狭く家用車で多数来訪する観光客用の駐車場整備が困難であること、域内の道路は起伏に富み、カーブの多い狭幅員の生活道路であること、また積雪、雪崩、落石、洪水といった自然災害に見舞われる危険度の高い場所であること、などである。

一方、社会条件としては、自然・人文両分野の魅力的な観光資源を有し、それを有効に活用できる鉄道、路線バス、ロープウェイ、ケーブルカー、リフト、遊歩道などのアクセス交通が域内において整備され、年間を通じて多くの観光客が来訪できる場所である。

1988年に設立されたスイス・カーフリー観光地

共同体（Gemeinschaft autofreier Schweizer Tourismusorte, 略称GAST）は、観光客に満足のゆく観光活動を提供することを目標としている。加盟9カ所の村または集落<sup>3)</sup>では、宿泊・観光施設、交通機関、観光情報などにおける質の高いサービスと環境保全に努めている。なお、域内の主要な交通手段は、電気自動車（小型バス、タクシー、ホテルの送迎車）、馬車（ホテル客の送迎、遊覧）、自転車などである。

カーフリーリゾートは、上述した住民の生活環境や生業を維持するための必要性から生まれたことから、経済的にも精神的にも住民生活を向上させるものでなければならない。つまり、快適な住

民生活あつてのカーフリーリゾートの成立である。

アレッチ地域は、ローヌ河谷（Le Rhône）上流の標高1,900mを超える日向斜面に位置するフィーシャーアルプ（Fiescheralp, 人口1,250人）、ベットマーアルプ（Bettmeralp, 520人）、リーダーアルプ（Riederalp, 350人）の3集落の領域である。このうち、ベットマーアルプとリーダーアルプがカーフリーリゾートである。これらの集落へは、観光客はローヌの谷底地からロープウェイで到達する（図4）。

観光の始まりは1930年頃であり、1950年代のロープウェイの開通により観光地として発展する

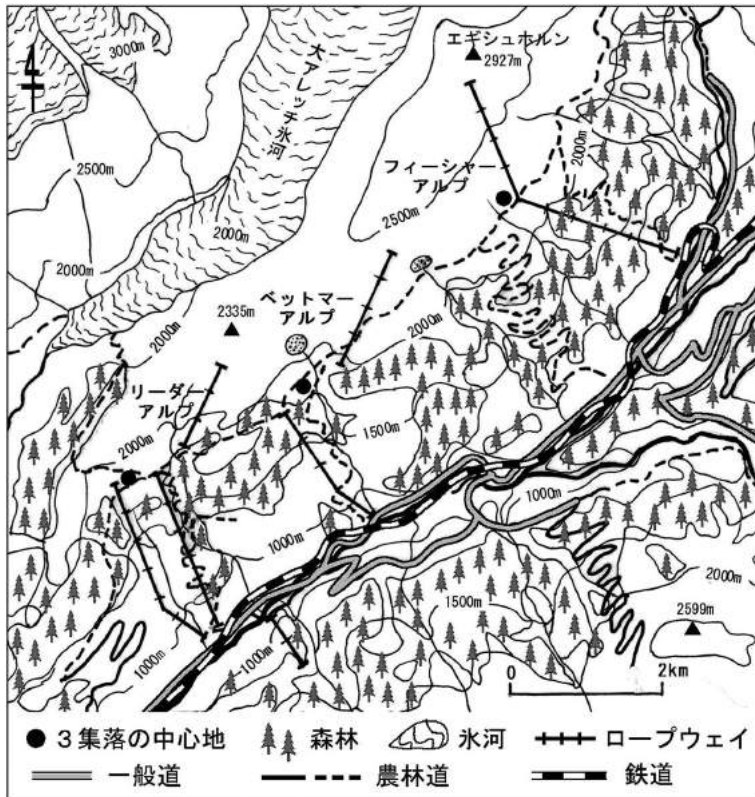


図4 アレッチ地域の土地利用（2013年）

（Landeskarte der Schweiz 1:200,000により作成）

ローヌ河谷の斜面は森林が分布し、標高2,000mを越えるアルプは冬季にスキー場として利用される。



ようになった。2010年の宿泊客数は、ベットマーアルプ39万人、リーダーアルプ30万人を数え、その8割が冬季客である。つまり、アレッチ地域のカーフリーリゾートはスキーを楽しむ冬季滞在型である。

## 2. ベットマーアルプの観光地の価値

ベットマーアルプが属する自治体のベッテン村 (Gemeinde Betten) は、ヴァリス州のローヌ河谷上部に位置し、2009年の人口は395人 (うち外国人29人)、面積は2,637haである。土地利用は、集落 (道路を含む) 35ha (1.3%)、農地419ha (15.9%)、林地315ha (12.0%)、そして氷河や岩石などの非生産地が1,868haで70.8%を占める。中心集落のベッテンは標高1,203mに位置し、村域の最高地点は世界遺産のアレッチホルン (Aletschhorn, 4,193m) である。ベッテンおよびベットマーアルプに至るロープウェイの駅が立地するローヌ谷低地が826mであることから、その高低差は実に3,300mにおよぶ。

ベットマーアルプは、既述のように自動車交通を排除したカーフリーの観光地であるが、観光客はロープウェイによって到達できる。このため観光地としての価値は、日向斜面で眺めが良く、新鮮な空気と静かな環境の中で、スキーや登山、ハイキングなどアクティビティを楽しめることにある。また、ベットマーアルプには森林限界を超えた場所に定住集落 (1,970m) が立地し、その集落にある「雪のマリア礼拝堂」(1697年建立) は、文化遺産としての価値が高い (Albrecht, 1997)。さらに、ベットマーアルプは、アレッチ地域の観光拠点として、各種施設が整備されている (図5)。

## 3. ベットマーアルプの観光の多様性

1930年頃に始まったベットマーアルプの観光は、1951年のロープウェイと1985年の道路の開



図5 ベットマーアルプ

(2011年8月28日撮影)

写真の左側は集落、背後の放牧地の中央に氷河湖が見える。

通により飛躍的に発展し、農民に就業機会をもたらすことになった。また、経済的に豊かな生活を求めて移住する人も増え、1990年には就業人口の79%が第三次産業に従事するに至った。

ベットマーアルプの宿泊客数は、1980年代から90年代前半までは37万人前後で安定していた。しかし、90年代後半から減少が続き2005年には30万人に落ち込んだ。世界に目を向けると、20世紀末から新世紀初頭にかけて、鳥インフルエンザ (1997年, 2003年, 2004年)、アメリカ同時多発テロ事件 (2001年)、サーズ (2002年, SARS 重症急性呼吸器症候群)、イラク戦争 (2003年) といった世界規模の伝染病や紛争が発生し、世界的に外国旅行者が減少した。このことは、外国人宿泊者数が全体の半数を占めるスイスでも影響を受けた。その後は増加に転じ、2010年には過去最高の39万人となった。

2010年の宿泊客数の内訳は、冬半期 (11月～4月) 79%、夏半期 (5月～10月) 21%の構成比で、冬季のスキー観光が盛んである (図6)。また、宿泊客の59%がスイス人、これに次ぐドイツ人が34%であり、両者で93%を占める。宿泊施設

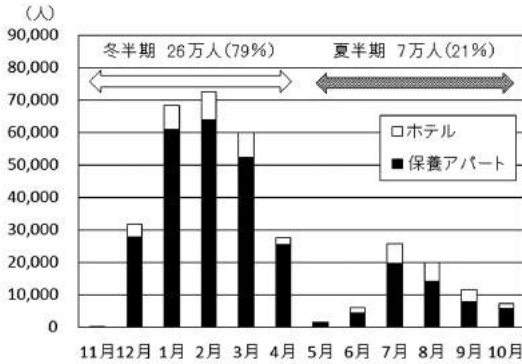


図6 ベットマーアルプの月別宿泊客数 (2009/10年)

(Bettmeralp Tourismus (2011) により作成)

の総ベッド数は4,417で、宿泊客の72%は安価で長期滞在が可能な保養アパート (3,900ベッド) を利用している。ベットマーアルプの宿泊施設の平均稼働率は年間24%、冬半期38%、夏半期10%であることから、夏季は休業する宿泊施設が多数みられる。観光客誘致の必要性から、ベットマーアルプにおいては、図7に示すとおり年間を

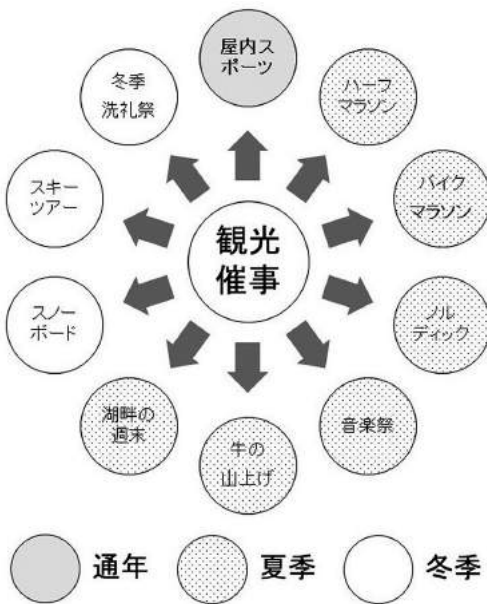


図7 ベットマーアルプの観光催事 (現地調査により作成)

通して多様なスポーツや文化的催事が行われ、観光の多様性を実現している。それを可能にしているのが、適切な自然環境の保全と各種施設の整備である。

#### IV サンモリッツにおける冬季観光の多様性

##### 1. 保養・スポーツに適した自然環境

スイス東部のグラウビュンデン州 (Kanton Graubünden) に位置するサンモリッツ村 (Gemeinde St.Moritz) は、人口5,400人 (2012年) である。言語は、スイスの公用語であるドイツ語と少数言語のロマンシュ語が話され、19世紀中頃から山岳リゾートとして発展してきた。とりわけ、スキーに代表される冬季スポーツが盛んであり、2度の冬季オリンピック (1928, 48年) や4度のアルペンスキー世界選手権 (1934, 48, 74, 2003年), 30回以上のボブスレー世界選手権など、各種冬季スポーツの世界大会が数多く開催されている (図8)。

サンモリッツ (標高1,800m) を中心とするオーバーエンガディーン地方は、アルプス山脈の南斜面に位置するため、夏季は地中海性気候の影響を受け高温で乾燥する。南西方向に幅広く開



図8 ディアボレッツァのスキー客

(2013年3月15日撮影)

ロープウェイ駅付近の標高3,000m地点から滑降の準備をするスキー客。



けた高所のオーバーエンガディーン谷は、空気が清浄であるため強い日射と気温上昇をまねくが、爽やかなマロヤ風（Malojawind）が常に南西方向から吹き込む。このためシャンパン気候（Champagnerklima）の異名をもつ。

サンモリッツの気温は、最暖月の7月は平均最高気温18.4℃、平均最低気温3.0℃である。最寒月の1月は平均最高気温-2.2℃、平均最低気温-18.0℃と寒冷であるが、標高が高くて湿度が低いいため昼間は強い日射と気温上昇で活動しやすい。集落背後の広大なアルプ放牧地は、冬季は晴天日が多くパウダースノーの雪質も手伝って、スキー

場の好適地となっている。オーバーエンガディーン（北緯46.5度）では、かつては標高1,950mまで穀物栽培が行われていた。ほぼ同緯度の隣国オーストリア・チロル州（Tirol、北緯47度）では、標高1,200mを超える土地では穀物は育たない。サンモリッツの両斜面は、標高2,000mまでモミヤカラマツの森林が分布し、日向斜面にはサンモリッツ、クラスタ（Cresta）、スプレッタ（Suvretta）、シャンプファー（Champfer）などの観光集落が立地している（図9）。

標高1,800m～2,000mに立地するこれらの集落は、周囲の景観の美しさも加味されて、あらゆる

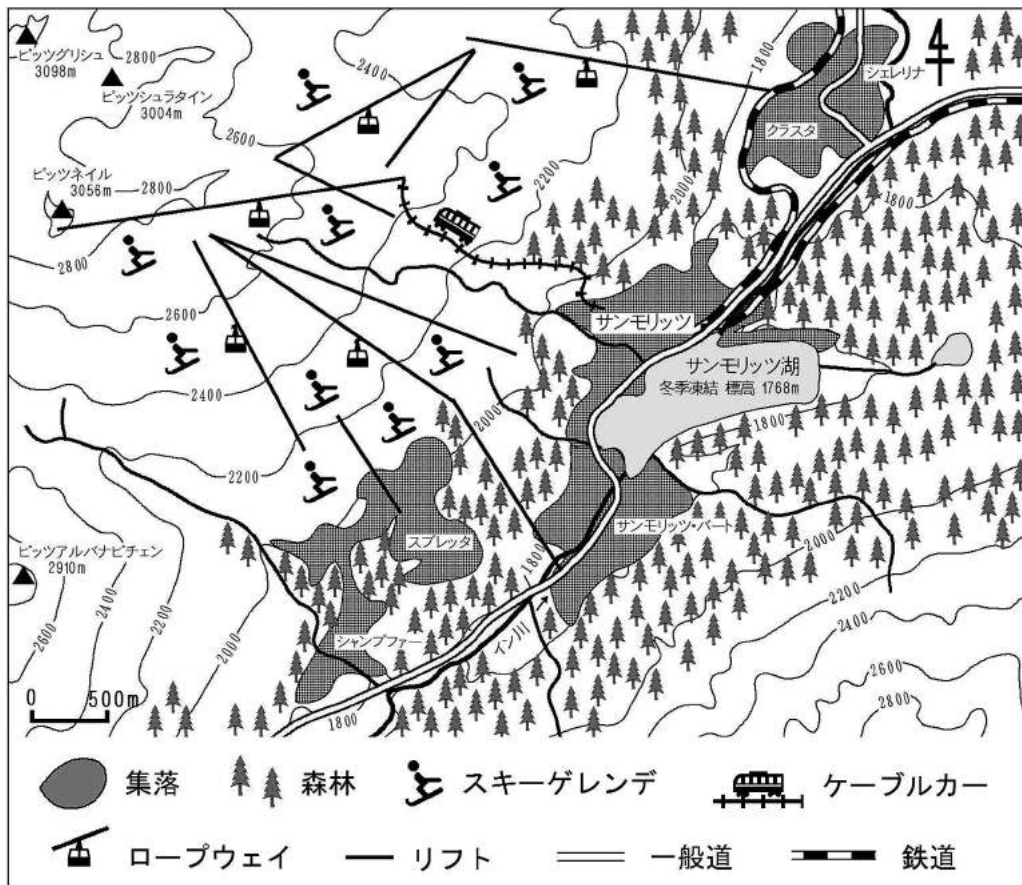


図9 サンモリッツの冬季土地利用（2013年）

（Landeskarte der Schweiz 1:25,000により作成）

西側の日向斜面はスキー場、谷底地は集落と湖が立地し、東側の日陰斜面は森林が広がる。

身体機能への刺激，とりわけ呼吸器官への刺激，血液循環の促進や造血，自律神経の調子を良くするなどの効能があり，スイスを代表する気候療養地となっている。

## 2. 観光地の形成

### 1) 観光の黎明期（19世紀中頃～19世紀末）

サンモリッツが，歴史書に始めて記述されたのは1139年である。中世のサンモリッツは，療養泉と保養に適した気候により，湯治場として認知されていた。1864年にスイス初の観光協会が設立されると，サンモリッツは観光地として発展するようになる。この年9月のはじめに，サンモリッツのクルムホテルの支配人であるヨハネス・バートルット（Johannes Badrutt）は，4名のイギリス人夏季観光客に次のような賭を申し出た。

「あなた方にもう1度冬季のサンモリッツに来てほしい。もし気に入ってもらえなければ， لندنからの往復の旅費を支払いましょう。サンモリッツにあなた方を冬季の長期滞在客として招待します。」

こうして，同年暮れから翌1865年の冬季にイギリス人観光客が来訪するようになり，冬季観光と冬季スポーツが始まることになる。現在，サンモリッツがアルプスのウィンタースポーツのメッカと称されるのは，このことによる。

1878年にクルムホテルにスイス初となる電灯が備えられると，宿泊客が増加するようになった。そして，サンモリッツにおいて，ヨーロッパ大陸で最初のカーリング・トーナメントが1880年に開催され，2年後の1882年には，スケートのヨーロッパ選手権も初めて行われた。以降は，1885年に最初の近代的冬季スポーツ施設であるクラスタ滑降路の整備，1889年にアルプスで最初のゴルフトーナメントの開催，グラウビュンデン州で最初の電話回線敷設，1890年には，最

初のボブスレーコースの整備と競技が実施された。さらには，1896年に，アルプスで最初の電気路面電車が開通するとともに，ヨハネス・バートルットの息子カスパー・バートルット（Casper Badrutt）が，パレス（宮殿）の名の付いたバートルット・パレスホテルの営業を担った。このように19世紀後半は，サンモリッツの観光基盤が形成された時代であった（図10）。

そして，サンモリッツは高貴で教養のある客の保養地となり，客室に家具を備えたホテルが立地するモダンで小さな観光集落が形成されるようになる。アルフレート・ヒッチコック，チャーリー・チャップリン，ヘンリー・フォード，トーマス・マン，ケネディー家などの著名人は，サンモリッツの常客であった。また，1904年の鉄道開通は，それまで降雪で交通遮断されていた冬季のサンモリッツに，多様な観光客を導く契機となったのである。

### 2) 観光の発展期（20世紀以降）

20世紀になり，観光集落の社会基盤整備やアクセス交通の整備が進むと，サンモリッツの観光は飛躍的に発展するようになる。1907年に，凍

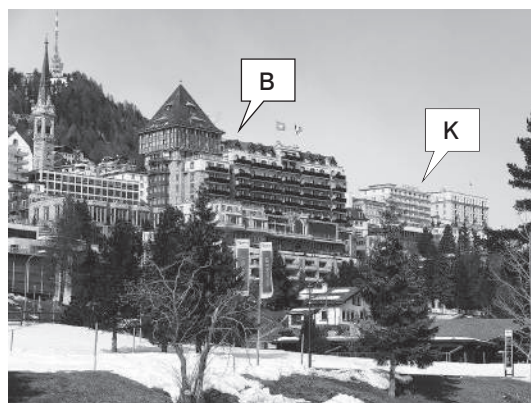


図10 サンモリッツの最高級ホテル

(2013年3月14日撮影)

Bはバートルット・パレスホテル，Kはクルムホテルである。

結したサンモリッツ湖面での最初の競馬が行われ、1910年にはスイスで最初のエンジン飛行機が飛行した。さらに、世界恐慌が起きた1929年にはスイス初のスキー学校が開設された。なお、前年の1928年と第二次世界大戦後の1948年に、前述のとおりサンモリッツで2度の冬季オリンピックが開催されたのである。

ヨーロッパ諸国の戦後復興ともなって、サンモリッツの観光は飛躍的に発展する。1979年にヨーロッパにおいて凍結湖面で最初のゴルフトーナメント、1985年は同様の凍結湖面での最初のポロトーナメントが、それぞれ開催された。続く1986年と1987年には、観光地として品質が保障された自筆署名の村名と、村章を持つスイス最初の村となった。また、ヨーロッパ大陸で最初のスノーボード世界選手権（1987年）と凍結湖面でのクリケットトーナメント（1989年）、アルプスで最初のポロ世界選手権（1995年夏）など開催された。なお、アルペンスキー世界選手権は、前述のとおり1934、1948、1974、2003年の4度開催され、来る2017年に5回目の開催が決定している。サンモリッツが発祥地であるボブスレーの世界選手権開催は、現在までに30回を超えている。また、1969年に始まったエンガディーン・スキーマラソンは40回を超え、1978年から開催されているエンガディーン・ウィンドサーフィンマラソンは、世界選手権も行われ30年以上の実績がある。

このようにしてサンモリッツは、ウィンタースポーツのメッカとしての確固たる地位を占めるようになったのである。

### 3. 観光の現状

#### 1) 観光客の宿泊

住民5,400人のサンモリッツには、毎年3,000人の季節労働者が訪れる。また、5,300ベッド40軒

のホテルおよび7,500ベッドを有する保養アパートが営業している。ホテルの半数は、4つ星と5つ星のクラスに属する。このように、観光はサンモリッツの重要な産業であり、地域全体の雇用を創出している（Engadin St.Moritz, 2013）。

サンモリッツの延べ宿泊客数は110万人（2012年）を数え、夏半期（5月～10月）と冬半期（11月～4月）の宿泊比率は2対3であり、冬季に宿泊客が多い。宿泊数の平均は、夏季3泊、冬季5泊である。また、宿泊客の70%は全世界から来訪する外国人である。冬季の宿泊客は、サンモリッツと周辺地域の交通機関（鉄道、路線バス、ロープウェイ、リフト、ケーブルカー）が乗り放題の「ホテルスキーパス」（1日一人25フラン、約2,500円〈2013年3月〉）を利用することで、長期滞在の広域観光を可能にしている。

サンモリッツでは、山、谷、湖水、森林など自然のなかで、夏季の登山、ハイキング、ウィンドサーフィン、冬季のスキー、スノーボード、ボブスレー、スケートなどスポーツを楽しむ老若男女の観光客が多いのが現状である。

#### 2) 冬季観光客の発地

冬季観光客の発地を明らかにするために、自家用車のナンバープレート調査を2日間実施した。2013年3月14日（木）〔晴〕は、サンモリッツ・ドルフ（St.Moritz-Dorf）の中心地にあるケーブルカー駅前駐車場と、サンモリッツ・バート（St.Moritz-Bad）のロープウェイ駅前駐車場にて昼間1回の調査を行った。翌日15日（金）〔快晴〕には、サンモリッツ・バートと郊外のベルニナ・ディアボレッツァ（Bernina Diavolezza）の両ロープウェイ駅前駐車場において、同様に調査した。調査台数は773台であり、分析結果は次のとおりである。

国別の観光客発地構成は、スイスが58%（452台）に対して外国42%（321台）である。スイス国内の内訳をみると、地元グラウビュンデン州が



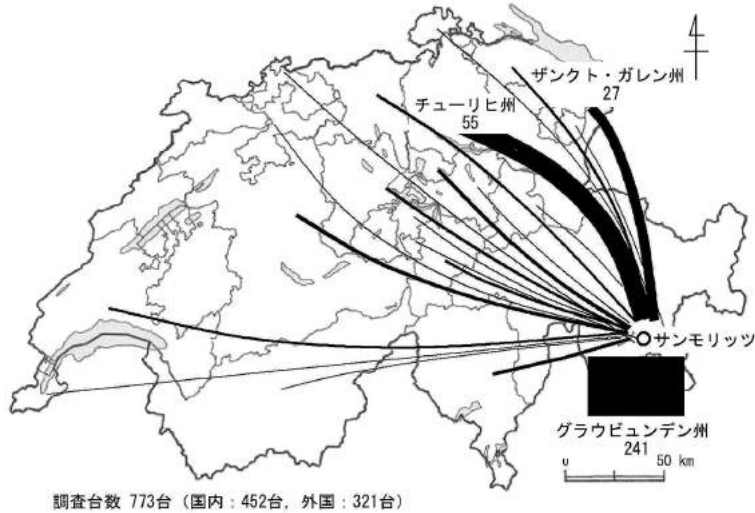


図11 サンモリッツのスイス人観光客発地 (2013年)  
(3月14日と15日のナンバープレート調査により作成)

53% (241台) で最も多く、第2位のチューリヒ州 (Kanton Zürich) 12% (55台) とは大きな開きがある。しかし、スイス26州のうち22州のナンバープレートを確認でき、スイス全国からサンモリッツに来訪していることが分かる (図11)。

一方、外国人はドイツが64% (206台) で最多であり、第2位のイタリアは18% (59台)、第3位オーストリア7% (22台)、第4位フランス3% (10台) の順位のように隣国からの来訪である (図12)。とりわけドイツ人観光客が6割を占める理由としては、ヨーロッパ最大の人口 (8,052万人, 2012年) を有する経済大国 (GDP: 3億6,360ドル, 2013年世界第4位) であり、同じドイツ語を母語としていることから経済的にも文化的にも旅行障害が少ないことがあげられる。また、イタリア、オーストリア、フランスのアルプス諸国に比べて、自国にスキーリゾートが少ないことも要因と考える。

#### 4. 冬季観光の多様性

2013年現在、サンモリッツの冬季観光客輸送

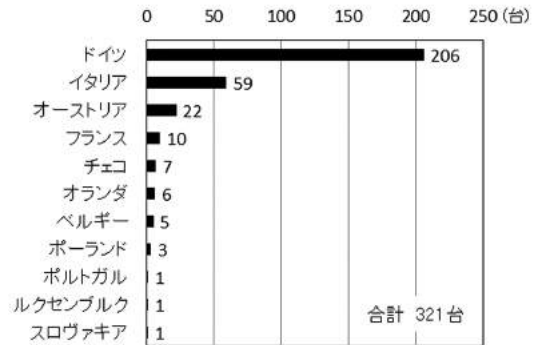


図12 サンモリッツの外国人観光客発地 (2013年)  
(3月14日と15日のナンバープレート調査により作成)

機関は、ケーブルカー7機、ロープウェイ3機、ゴンドラ1機、チェアーリフト19機、スキーリフト16機、ベビーリフト10機が営業している。また、アルペンスキー区域は、標高2,005m～3,057mの傾斜地1,050ha、33コースで総延長350km、冬季ハイキング・トレイルは総延長150kmが整備されている。スキー場の保安管理や休憩施設の整備が適切に行われているとともに、従業員の接遇も良好である<sup>4)</sup>。

このように、観光客を誘致する社会基盤整備や

従業員の接遇が充実しているため、山、谷、湖水、森林など多様な自然観光資源を有効に活用し、サンモリッツ・ドルフを中心とした同心円形の立体的観光構造が形成されている（図13、図14）。

換言すれば、サンモリッツにおける冬季観光の多様性は、図15に示すとおり多彩なスポーツを可能にした地形や気候の自然環境、それを有効に活用するための宿泊、交通、スポーツ、商業、医療などの社会基盤整備、そしてスポーツ競技の国際大会の積極的な開催によって実現しているのである。

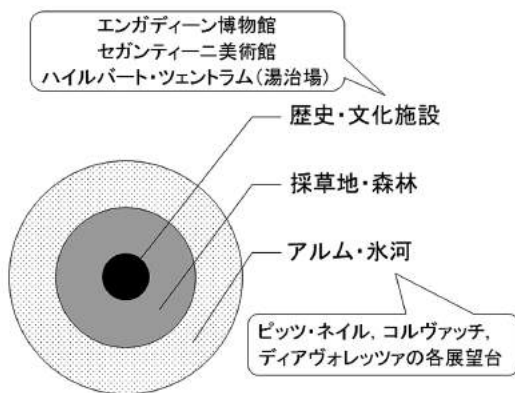


図13 サンモリッツの観光資源分布構造  
(現地調査により作成)

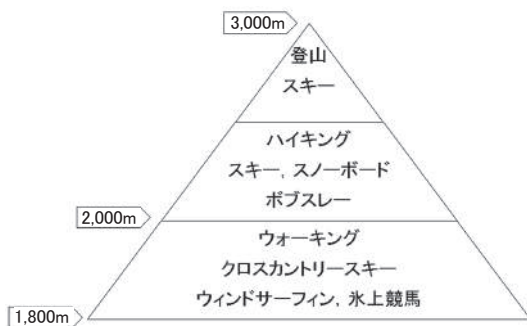


図14 サンモリッツのアクティビティ垂直構造  
(現地調査により作成)

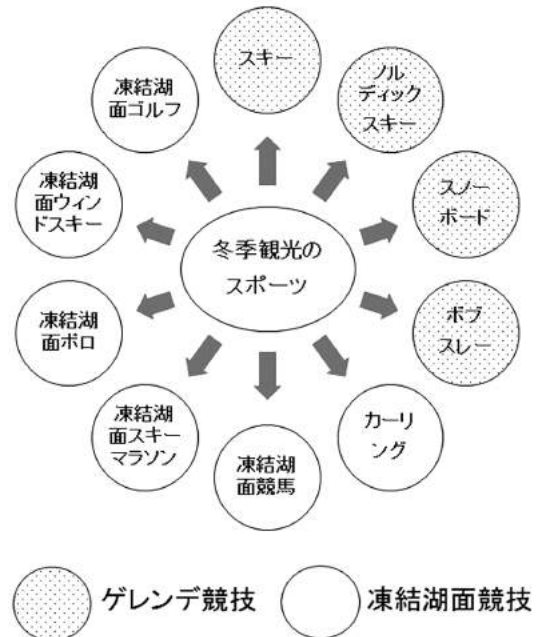


図15 サンモリッツの冬季アクティビティ  
(現地調査により作成)

## V おわりに

本稿では、スイスアルプス世界自然遺産のアレッチ地域における自然環境に配慮した多様な観光の取り組みと、サンモリッツにおける冬季観光の多様性の実態について明らかにした。その結果を整理すると、以下のとおりである。

訪れる人々を魅了するスイスアルプスの自然景観と文化景観は、多数の官民関係者の積極的な参加によって保護されている。それは、自然・文化景観の多様性と固有性、自然および近自然の生態系、動植物相など自然環境を保全する内容である。

スイスアルプス周辺地域の発展において、最も重要視されているのが観光業の推進である。世界遺産の学術・芸術的価値に加え、観光資源としての価値を維持し一層高めるためには、伝統的なアルプ農業の営みによる放牧地の管理が不可欠である。このことは生態系を維持し、雪崩や洪水など

自然災害の軽減に通じる。

森林限界を超えた標高2,000mの高所に位置するカーフリーリゾートのベットマーアルプは、背後の大アレッチ氷河やアルプス山脈の雄大な眺望を最大の観光資源としている。宿泊客の79%は冬季に来訪するが、四季の自然や夏季の家畜放牧、住民の伝統文化を観光資源として有効活用し、年間を通じて各種スポーツや文化的催事による多様なアクティビティを実現している。

一方のサンモリッツは、標高1,800mの谷底地から3,000mの山頂まで、同心円形の立体的観光構造が形成されている。中世に療養泉と保養に適した気候により湯治場が形成され、1864年の観光協会設立により冬季観光が始まった。冬季スポーツ競技の国際大会を積極的に誘致・開催することで、住民の生活基盤やスポーツ、宿泊、交通など各種施設の整備が進展した。その結果、多様な冬季スポーツの体験や観戦、各種観光催事による冬季観光が発展したのである。

以上、アレッチ地域とサンモリッツを事例としたスイスアルプスにおける自然環境保全と多様なアクティビティは、地域の自然や農業、歴史や文化を観光資源として有効に活用し、山地住民の生業である農業と観光業を共生させることで実現している。つまり、地域の自然環境に適応する観光業が成立している。魅力的な観光地とは、障がい者や健常者、国民や外国人を問わず、老若男女のあらゆる客層に対応した施設やサービスを整備し、観光の普遍性と地域性を併せ持ったところであると考える。

#### [付記]

本稿は日本地理学会（2011年春季、2012年春季）、人文地理学会（2010年、2013年）、地理空間学会（2014年）において口頭発表した内容に、継続調査の結果を加筆し、体系的に整理したものである。

#### 注

- 1) 休暇用住宅は、部屋・台所・浴室・トイレなどがセットになり、自炊をして休暇を愉しむための賃貸宿泊施設である。ドイツ語のFerienwohnungに相当し、観光客が休暇をとって保養することから、これを池永は「保養アパート」と訳している。
- 2) アルプ農業（アルム農業）は、アルプス山脈の森林限界を超えた高所に展開する草地（アルプまたはアルム）を、夏季家畜放牧に利用する農業である。
- 3) スイス・カーフリー観光地共同体に加盟している9カ所は、リギ・カルトバート（Rigi Kaltbad）、ブラウンヴァルト（Braunwald）、シュトース（Stoos）、ヴェンゲン（Wengen）、ミューレン（Mürren）、ツェルマット（Zermatt）、サースフェー（Saas-fee）、リーダーアルプ、そしてベットマーアルプである。
- 4) スキー場での出来事であるが、満員のロープウェイが昇って来て、バケツの水をひっくり返したような勢いでスキー客が降りると、下山は筆者の他に2、3名のスキー客のみであった。下りのロープウェイが麓の駅に到着すると、ゴンドラの操縦員は、カタコトの日本語で筆者にあいさつして特別な出口を案内した。それは、乗り込んで来るスキー客が多く、しかもヘルメットをかぶりスキー板を持っているため事故のないようにとの配慮であった。

#### 文 献

- 池永正人（2009）：山地の生活（スイスの山岳観光地）。中村和郎・高橋伸夫・谷内 達・犬井 正編『地理教育講座（第IV巻）、地理教育と系統地理』古今書院、893-906。
- 池永正人（2012）：アルプスの山岳リゾート・ツェルマット。山村順次編著『観光地理学－観光地域の形成と課題 第2版』同文館出版、67-71。
- 石原照敏（2009）：スイス・高アルプスにおける観光業と農業の共生形態と共生システム。経済地理学年報、55、369-389。
- 石原照敏（2010）：スイスにおける観光業と中小農業経営の共生形態。地域地理研究、16(1)、1-18。
- 坂本英夫（2012）：『地理の目で歩く スイス・アルプス』ナカニシヤ出版。
- 中西健夫（2013）：ヨーロッパアルプスを愉しむ。中西健夫『山の本をつくる』ナカニシヤ出版、171-234。
- Albrecht, L. (1997) : *Die Reichtümer der Natur im Wal-*



- lis : Aletsch*. Rotten Verlag.
- Bachmann, T. (2006) : *Jungfrau-Aletsch-Bietschhorn*. Rotpunktverlag.
- Bettmeralp Tourismus (2011) : *Bettmeralp Jahresbericht 2010*.
- Bundesamt für Statistik (2013) : *Schweizer Tourismusstatistik 2012*.
- Engadin St.Moritz (2013) : *Geschäftsbericht 2012 : Diese Berge, diese Seen, dieses Licht!*
- Galli, M. and Fromm, G. (2013) : *Journey through St.Moritz and the Engadine*. Stürtz.
- Jungfrau-Aletsch-Bietschhorn World Heritage Association (2005) : *Management Strategy for the Jungfrau-Aletsch-Bietschhorn UNESCO World Heritage Site*.
- Kummer, E. (2000) : *Erinnern Sie sich Aletsch*. Rotten Verlag.
- Lütolf, M. (2012) : Sternstunden für Gäste und Ferienwohnungsbesitzer. *Montagna* 3, 8-9.
- Riederalp Mörel Tourismus (2011) : *Riederalp Geschäftsbericht 2010*.
- Rucki, I. (2013) : *Das Hotel in den Alpen : Die Geschichte der Oberengadiner Hotelarchitektur ab 1860*. hier+jetzt.

## **Environmental Preservation and Tourism in the Swiss Alps**

IKENAGA Masahito

Faculty of Human and Social Studies, Nagasaki International University

This paper focuses on environmental preservation and tourism in the Aletsch area of the Swiss Alps, including the Jungfrau-Aletsch World Heritage Site, and the current condition of winter tourism diversity in Saint Moritz. In the Aletsch area, the cultural landscape, ecosystem, and diversity of nature are preserved by government officials and local citizens. Bettmeralp, which is close to Aletsch and offers a view of the Aletsch glacier, effectively uses its natural environment, including livestock pasturing during the summer, residents' traditional culture, and various annual sports and cultural events, as a tourist attraction throughout the year. On the other hand, St. Moritz, which is known as the birthplace of winter sports, held an international convention for winter sports, which led to an improvement in residents' quality of life. Winter tourism developed from visitors watching winter sports games and other various events.

As mentioned above, environmental tourism is developed in both areas.

**Keywords:** tourism diversity, environmental preservation, tourist activity, Bettmeralp, St. Moritz